ササン朝ペルシアの美術工芸品にみられる宮廷楽器と楽人
―水注（vessel），鉢（bowl），皿（plate）―

荻　美津夫

はじめに

前稿「ササン朝ペルシアの宮廷楽器と楽人ータク・イ・ブスターンの浮彫り資料を通してー」では，イラン西部のザグロス山脈中にあるケルマンシャー市の郊外，東北 11 キロの地点に位置しているタク・イ・ブスターンのレリーフを検討することで，ササン朝の宮廷音楽の一端を明らかにした[1]。同遺跡に関しては，ペローズ（在位 459 ～ 484），ホスロー 1 世（在位 531 ～ 579），ホスロー 2 世（590 ～ 628），アルダシール 3 世（在位 628 ～ 630）の創建とする諸説がみられるが，いずれにしても，同朝の後半から末期にかけての遺跡であったと推察される。同遺跡の大洞の中には，「猪狩り」と「鹿狩り」の浮彫りが残されており，狩猟をテーマにしながらも，その奏楽の状況からササン朝の宮廷音楽について次のことが知られた。

- 狩猟での儀礼的祭りの場において，神を讃え，狩猟する王を祝福する歌謡が唱われ，管弦による荘厳化がはかられた。
- ここで奏されたのは；宮廷音楽や軍楽であり，宮廷音楽としてハープを中心に，縦笛・パンパイプ・笙風楽器[2]の楽器があり，軍楽として，棒状トランペット[3]・鍋型太鼓・大小組の鍋型太鼓・腰鼓（真ん中が少々くびれた，両面に皮が張られた鼓）の存在が考えられる。
- 宮廷には男女の楽人がおり，その長は，角形ハープとは異なる直角型ハープを奏し，王に直属する楽人として他の楽人たちを主導した存在であったろう。
- 「猪狩り」の場面からは法螺貝，イスラム時代の『シャー・ナーメ』や『ホスローとシーリーン』などの作品からは，リュート系絃楽器の存在も考えられる。
- 『シャー・ナーメ』や『ホスローとシーリーン』などの作品からは，王を祝福し，あるいは王を代弁する即興的歌謡が唱われたこと，その際に伴奏楽器としてハープ（竪琴）やリュート系絃楽器（琵琶）が重要な楽器とされていたと考えられる。

同朝の宮廷音楽の状況を理解する上において，レリーフとならんで図像資料として重要な位置を占めているのが，美術工芸品に描かれた絵画資料である。これには水注（vessel），鉢（bowl），皿（plate）等があり，ことに 6・7 世紀のササン朝後期やポスト・ササン朝時代の作品には，王の饗宴における奏楽の様が描かれており，楽器や楽人を確認することができる。

ペルシアの美術工芸品に関しては多くの研究があらわされているが，本稿では，P・O・ハーパー，A・C・ギュンターと P・ジェット，前稿でも触れた M・D・ギューユマン，ならびに深井晋司などの研究書 (4) に掲載された写真資料に基づき，それぞれの意見を参照しながら，美術工芸品に描かれた楽器・装束等を検討する。これらの美術工芸品に描かれた絵画資料を検討することによって，ササン朝ペルシア後期の宮廷音楽の楽器や楽人について考察していこう。

1　女神文水注

女神文水注は，かつてアナーヒター女神装飾鍍金銀製把手付水瓶と称されてきた作品で，日本では中近東文化センターが所蔵するものがあり，管見では、ほかにジュネーブ美術館，ワシントン DC のフレア・ギャラリー（Freer Gallery），ローマのオリエント芸術博物館，ヘラマネック・コレクション（Collection Heeramanec）所蔵の作品などが知られる。ここに描かれているほぼ裸体に近い姿の女性は，これまでアナーヒター女神とされてきたが，タークー・イ・ブスターンの奥壁帝王叙任式図にみられるアナーヒター女神は正装してあらわされていることなどから，同女神ではなく，アナーヒター神殿の巫女，春夏秋冬の祭宴の象徴，ゾロアスター教の天国に住み，善なる死者の魂を迎えるというダエナ（Daena）などとする説がある (5)。

中近東文化センターの女神文水注は（図版Ⅰ），イラン高原北部，カスピ海の南に位置するギラーン州から出土しており，ササン朝末期，6 ～ 7 世紀頃の作品とされている (6)。また正倉院に収蔵されている漆胡瓶は類似の作品と考えられ，法隆寺献納御物の白銅龍首水瓶などとともに，ペルシア文化がわが国に伝来したことを示すものの一つとして注目されてきた。この女神文水注には，5 人の女性が，それぞれ蓮花文様で連結された葡萄唐草文様で縁取られた楕円文の中に配置された構図となっている。

女性は，両手にそれぞれ花や鳥などの採りものを持ち，腰をくねらせ踊っているかのようなポーズをとり，その斜め上方には奏楽する 5 人の楽人が配置されている。深井晋司は，岸辺成

図版　Ⅰ　中近東文化センター蔵

図版　a　中近東文化センター蔵

図版　b　中近東文化センター蔵

図版　c　中近東文化センター蔵

図版　d　中近東文化センター蔵

図版　e　中近東文化センター蔵

雄の説にもとづき，5人の楽人のうち，楽人A（図版a）とC（図版c）の2人は「ササン王朝特有のリュート」で，バルバッドとしている。楽人B（図版b）はタンバリンとし，楽人D（図版d）の奏する楽器を竪型ハープとし，楽人E（図版e）の楽器を太鼓で縦胴の片面鼓2つを左右において両手で奏するとしている。さらに，その服装について，次のように述べている[7]。

頭部は簡素な一本の額装飾で結髪され，頭部には小さなおわん帽をのせている。頭髪は，女神像の場合と同様に，肩の辺で「お下げ髪」風に三つ組に編み，両肩の脇に垂れ下げている。着衣は上衣とズボンとに区別され，特に上衣の方は筒袖であり，体の正面であわせる形式をなし，その上一本の幅広の帯で締められている。ズボンの方はふくらはぎの上下二箇所にバンドらしいもので締め上げているものが見られるが，果たしてズボン形式のものか，裸脚に臑當をつけたものか，正確には判断し難い。また裸足か靴ばきかも不明である。またいずれも丸玉の頸飾をかけている。なお，太鼓を両脇に持つ楽人とタンバリンをもつ楽人の場合に乳房の表現がみられる点からして，これらの楽人はいずれも女人であっ

たことが推察される。

楽器の種類については，AとCがリュート系弦楽器，Bがタンバリン，Eが2つの鍋型太鼓で，特に異論はない。しかし，Dのハープに関しては，M・D・ギューユマンは，①フレームには共鳴胴がついておらず，斜や水平のフレームには穴あるいは釘と思われるのがみられること，②ハープの初期のものは水平のフレームは厚いが，これではその例がみられないこと，③ハープにはしっかりとした三角形の中の垂直なフレームは存在しない。メソポタミアのハープと同じくイランのハープでも常に（1ケ所が）開いている，という3つの理由をあげ，平面の共鳴板をもつプサルテリウムの類いではないかと述べている[8]。このDの楽器は，15本前後の絃が上から下へ真直ぐに描かれ，縦（斜）と横（水平）のフレームの角度が浅い。たしかにハープとするならば，先のターク・イ．ブスターンに描かれていた2種のどれにもあてはまらない角形ハープとなろう。プサルテリウムはチター系の楽器であり，13世紀のサフィー・アッ=ディーン・アブド・アル=ムーミンによる『キターブ・アル=アドワール（旋法の書）』に長方形型で16コースほど張られた弦をもつプサルテリウムが描かれている。また，14世紀の作者未詳の作品『カシュフ・アル=フムーム（心配事の除去）』には，プサルテリウムの奏楽図が描かれており[9]，これによると台形状でそれを膝の上に置き右腋で固定して右手の指ではじいて弾いていることが窺われる。Dの楽人も右腋に抱えて奏しており，その奏法は両者まったく一致している。確かにギューユマンが指摘しているように箱を形成する三つ目のフレームも確認できることから，三角形の形態をもつプサルテリウム系楽器の可能性が十分考えられよう。

また，この女神文水注にあらわされた図では，楽人の奏楽の様子や装束等について，次の2点が注目できる。第1点目は，彼らはいずれも共通の衣装を着しており，深井は，頭には「おわん帽」と「お下げ髪」がみえると指摘するが，頭巾のようなものを着しているとは考えられないであろうか。また，衣装は丸首の上着をボタンで止め，腰から下の部分が切れているガウン風のもので，腰の辺りを帯でとめているものではなかったかと思われる。2点目は，深井は胸の表現（ことに2つの鍋型太鼓のEの楽人）から女性の楽人とみなしているが，彼らの奏楽の姿勢が胡座をかいており，これはターク・イ・ブスターンのレリーフで述べたように，女性が端座していたのに対して胡座の姿勢は男性であったと思われること，胸の表現は大きく描かれている5人の女神と比べると明らかに異なった描写であることから，男性の楽人であったと推察される[10]。

ターク・イ・ブスターンの狩猟図は，摩滅がすすんでおり，頭等の細かい部分まで知りがたいが，「猪狩り」の王船に乗っている楽人の装束は，前稿で指摘したように，花柄の衣装を着ていることが知られる。船に乗る5人の女性のハープ奏者についても，何か文様の付された丸首風の装束であったことが窺える。「鹿狩り」では，細かいところは不明だが，管弦楽の一行では，男性はおかっぱ風の頭髪で，膝下まであると思われるガウン風の衣装のようであり，女性もやはり同様の衣装と推測される。軍楽隊では下方のトランペットや腰鼓の3人はやはりガ

ウン風の衣装であるが，上の大小の鍋型太鼓，トランペット（あるいはダブルリードの縦笛）の3人はそれとは異なっているようであるが未詳である。

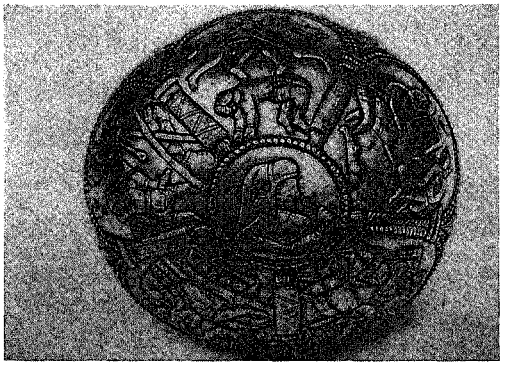
そこで，さらに鉢（bowl）や皿（plate）にあらわされた楽人について検討していこう。

2　鉢(bowl)，皿(plate)

7世紀のササン朝末期の頃の作品と考えられるサックラー・ギャラリー（Sackler　Gallery）蔵の鉢（bowl）（図版Ⅱ）には，側面に5つの場面が描かれている。すなわち，主人の男女の饗宴，その右隣に，順に，給仕をする召し使い，レスリングをする者，ゲームに興じる者，そして男女2人の楽人の図がみられる。男女2人の奏楽図は，饗宴の左隣に位置しており，饗宴での奏楽とみなすことができる。これによると，男性の楽人は真ん中のくびれた腰鼓風の楽器を，女性はハープを弾いており，かれらの衣装もかなりはっきりと描かれている（図版Ⅲ）。腰鼓は，タークー・イ・ブスターンの「鹿狩り」の肩から紐を付けた鼓と同種のものと推察され，締太鼓であったことも確認できる。ハープは水平の横のフレームと弓形になった縦のフレームで弓形部分が厚くなっており，共鳴胴であったと考えられる。タークー・イ・ブスターンの「鹿狩り」において，女性によって奏楽されている弓形の縦のフレームをもつ角形ハープと同種のものであろう。

衣装についてみると，男性はズボン風のものと，腰から下の左右の部分が切れている丸首のガウン風のものを着ており[11]，髪は短髪あるいは坊主頭で描かれている。主人の男女饗宴の場面の次の場面にみられる召使いとされる服装に近い。女性はズボンの上からガウン風の上衣を着，長い髪をオサゲ風に一つにまとめて後ろに垂らし，ヘアーバンドのようなものを締めているように窺える。これらガウン風の衣装は，既述のようにタークー・イ・ブスターンの「鹿狩り」での男性の楽人にもみられた[12]。

続いて，大英博物館蔵の皿（plate decorated with a banqueting scene）を検討してみる。これは，7世紀のポストササン朝（post-Sasanian）の頃のものとされており[13]，王あるいは貴族



図版　Ⅱ

図版　Ⅲ

図版Ⅱ，Ⅲは，P. O. Harper, *The Royal Hunter: Art of the Sasanian Empire*, 1978. より転載。

とその婦人による饗宴と2人の楽人，召使いが描かれている。楽人は2人とも立奏しており，リュート系弦楽器と先端が曲がり太くなった縦笛が奏されている。彼等は頭にやはりヘアーバンドらしきものを巻き，丸首のガウン風の服を着てベルトをしているようにみえる。手を胸に組んで顔を布で覆っている召使いも同様の服装をしている。

また，サンクトペテルブルグ のエルミタージュ美術館蔵の銀皿（silver plate）（以下，エルミタージュ A とする）にも，同様に饗宴の様子が描かれ，7世紀後半から8世紀初頭の頃のものとされている[14]。ここでは，中央で王が食事をし，その右手と下方の位置には食事の準備や給仕をしていると思われる召使いがおり，やはり布で口を覆っている。王の左手の位置には，2人の楽人による奏楽の様子が描かれている。それによると，2人とも胡座風に足を組み，1人はハープ，他の1人は先端が広くなった縦笛を演奏している。楽人はともに男性と推察されるが，その衣装はやはり丸首のガウン風のもので，真ん中をボタンで留め，帯かベルトをつけ，頭にはやはりヘアーバンドを締めている。召使いの方は丸首の筒型のガウン風の衣装で下の部分に何本かスリットが入れられていることが知られる。

エルミタージュ美術館にはもう1種類の王饗宴の皿（plate）が収蔵されている（以下，エルミタージュ B とする）が，これでは縦笛とリュート系楽器がみられる。その縦笛は全体が割と細く描かれ，先端にいくにしたがって太くなっており，これはおそらくはダブルリードの楽器であろうと思われる。先にあげたエルミタージュ A の縦笛は，それよりも太めに描かれておりトランペット風でもあるが，やはり先にいくにつれて太くなっており，同様の楽器であったろう。なかには，既述の大英博物館所蔵の皿（plate）のように，明らかに先端が大きく上方に曲がりトランペット風に描かれたものもみられるが，基本的にはダブルリードの楽器ではなかったかと考えられる。

以上のほかに，ミシガン大学蔵・シンシナティ美術館蔵などの銀皿（silver plate）などには，リュート系弦楽器が描かれている。これらをみると，リュート系弦楽器には2・3種類あるように窺われる。すなわち，ミシガン大学蔵・シンシナティ美術館蔵・エルミタージュ美術館蔵の銀皿（silver plate）や中近東文化センターの女神文水注などに描かれているリュート系弦楽器によると[15]，雫型胴をもち糸巻きの部分が外側に反っている曲頚のもので，絃そのものや絃を固定している部分や糸巻きの描写から四弦であったことが窺われる。フレットはないようであるが，撥をもって弾かれている例と指で弾いていると思われる例がみられる。また，リヨン美術館（Beaux-Arts Museum）の水注に描かれた楽器では，胴の表面の上下2箇所に対称的に凸型（凹型）の溝が彫られていることも注目される。これらは，中国や日本で言う琵琶型リュートということができよう。これらは楽器を上向きあるいはほぼ水平に持って弾いているが，同様の形をもちながら胴の部分がやや細身で楽器を下に向けて，弾く腕を下から出して指で弾いている例が窺われるが（大英博物館蔵 silver plate），これがたんなる描写の仕方によるものなのかは明白ではない。日本で言えば，インド源流と考えられている[16]五絃琵琶の形状，弾き方に近いが，曲頚であることが異なる。

また，メトロポリタン美術館蔵の皿（plate, Metropolitan Museum）は，これらの琵琶型リュートとは異なり，棹の部分が長く描かれた，いわゆる首長リュート系の弦楽器が3点ほどみられる[17]。しかし，いずれもローマ文化の影響がみられ，これらの楽器についてはササン朝で使用されていたものかどうかは明白ではない[18]。

3　宮廷楽人と，叙事詩等にみられる奏楽場面

ここまでに触れたレリーフや美術工芸品にあらわれた音楽状況から，狩猟祭祀儀礼，饗宴，軍楽儀仗における奏楽の場が窺われる。その結果については前稿で述べ，本稿の最初に整理したので繰り返さない。水注（vessel），鉢（bowl），皿（plate）の検討結果に関わる部分のみに触れる。

前稿から，宮廷には男女の楽人がおり，その長は，角形ハープとは異なる直角型ハープを奏し，王に直属する楽人として他の楽人たちを主導した存在であったことが知られたが，エルミタージュ美術館蔵の銀皿（エルミタージュ A）に描かれた王の饗宴でのハープ奏者も，同様な存在であったであろう。既に指摘した『王の書』に記述されているホスロー・パルヴィーズ（ホスロー 2 世）時代のバルバドやサルカシュのほかに，『ホスローとシーリーン』に登場するニギーサーがこれに相当した楽人であったと考えられる。

大英博物館蔵やエルミタージュ美術館蔵等の皿（plate）に描かれた王饗宴の奏楽によると，王の個人的な饗宴では，近侍していたと思われる楽人が直角形ハープとダブルリードの縦笛，あるいは琵琶型リュート系弦楽器とダブルリードの縦笛の組み合わせによる奏楽が想定される。

その宮廷楽人は，丸首のガウン風の衣装を着ていることが窺われ，これらには前で合わせたボタンやベルト・帯で留めるもの，筒型になったものがあり，後者では腰から下の部分にスリットが入ったものが存在していたと推察される。王の装束にも同様のものがみられ[19]，これは，肩のところは袖無し風にもみえることからも，当時の宮廷風の装束ではなかったかと推測される。これらの楽人の装束も，宮廷風装束であったと察せられる。また，帽子や頭巾風なものをつけた楽人の例は一点しかみられなかったが，装束は同様のものを着していることから，帽子や頭巾風なものをつける場合もあったのではないかと考えられる。

叙事詩にみられる宮廷楽人についても，前稿で触れたように，軍楽のほかに，饗宴においてリュート系のバルバッドやハープを弾いて歌曲を歌う楽人が頻繁にあらわれている。ニザーミーのホスロー・パルヴィーズ（ホスロー2世）とシーリーンのロマンスを主題とした『ホスローとシーリーン』[20]における音楽描写をみると，末部に近いところで，2 人の思いを代弁してバルバッドの琵琶（リュート）とニギーサーの竪琴（ハープ）の競演部分は圧巻であり，琵琶（リュート）と竪琴（ハープ）の即興による歌曲を詠う際の役割が明らかである。ほかにも琵琶（リュート）と竪琴（ハープ）の競演が多いが，図像資料では絃楽器どうしの合奏は窺え

なく，直角形ハープとダブルリードの縦笛，あるいは琵琶型リュート系弦楽器とダブルリードの縦笛の組み合わせがみられた。また，ダブルリードの縦笛と考えられる葦笛については，同書の中に「吟遊詩人は葦笛に唇をあて，唄い手は琵琶に合せて抒情詩を詠う」とみえる[21]。さらに，その直前の部分に「胡弓はモーゼの祈りにも似て絶え入るごとく」とあり、擦絃楽器と思われる記述がみられる。この物語に記載された楽器の中には，当然同書が著わされた 12 世紀後半のイスラム音楽の楽器が反映されていることも考えねばならないであろう。したがって，これらの楽器がササン朝時代の楽器とみなせるか否かは難しいところであるが，本稿でみてきた当該時代に製作された美術工芸品に描かれた楽器から，胡弓（ルバーブ）を除いて，ササン朝時代の音楽状況を反映しているとみてよいものと推察される。

おわりに

ササン朝ペルシアの音楽文化は，やがて西アジア全体を飲み込むイスラム勢力の国家に吸収，継承されていく。同時に，そのササン朝ペルシアの音楽文化の一部は東漸したことが考えられる。

楽器においては，バルバッドが中国へ伝来し琵琶となり，ハープは竪箜篌，ダブルリードの縦笛は篳篥となったことは著明なところである。管見では敦煌莫高窟第 1 期石窟北涼時代（421 ～ 439 年）に属する 272 窟には，琵琶・竪箜篌とダブルリードと思われる縦笛が複数描かれている。272 窟は，その全体や龕の天井がドーム状の構造を持っていたが，このような構造は莫高窟では他に例がなく，「西域の強い影響が認められる」ものとなっており[22]，この点においても注目される[23]。

中国では，隋・唐の時代になると，九部伎・十部伎等の音楽制度が創設され，周辺諸国の楽器・楽曲が組み入れられた音楽が成立する。その大部分は，亀茲伎（クチャ）・高昌伎（トルファン）・疏勒伎（カシュガル）・康国伎（サマルカンド）・安国伎（ブハラ）等の西域関係で占められていた。隋，唐最初期は，ササン朝の末期の時期にあたる。隋代虞弘墓出土の石椁のレリーフ等にはササン朝の影響が色濃く残されており[24]，東西交流が活発であったことを物語っている。

ササン朝の文化は，中国を経由して日本まで伝えられた。正倉院収蔵の白瑠璃碗・瑠璃坏・緑瑠璃十二曲長坏・瑪瑙坏・漆胡瓶はペルシアで作製されたものであり，法隆寺・正倉院に伝えられた獅子狩文錦は，ペルシアの狩猟文の影響を受け唐において製織されたと考えられる。音楽では，日本の雅楽の大食調が西域色の濃い調子であったと考えられているが[25]，これまで述べてきたササン朝の音楽文化との結びつきが考えられそうな点を，直感的に（きわめて学問的ではないが）あげて，稿を閉じたい。

・ササン朝楽人が帽子や頭巾風なものをつけていることが認められるならば，その姿は日本の雅楽の楽人の装束の鳥兜に類似しているといえよう。

・あるいは，冠には「翼の装飾が多く」[26]，ホスロー2世，アルダシール3世，ヤズドガルド3世，ペローズなどの冠の装飾はそれにあたる[27]。また，鳥をモチーフにした装飾も多く，鳥兜にはササン朝ペルシアの冠の影響があるか。

・ササン朝楽人のガウン風の衣装の中には，左右にスリットが入っているものがみられたが，日本の走舞に着られる裲襠装束に類似している。

・ササン朝楽人の奏楽の姿勢が胡座風であったが，日本の雅楽楽人の奏楽姿勢も胡座である。

当然，シルクロード上の諸地域，中国，朝鮮等の楽人装束との比較検討が課題となろう。

註

(1) 荻美津夫「ササン朝ペルシアの宮廷楽器と楽人－タークー・イ・ブスターンの浮彫り史料を通して」(『環日本海研究年報』第13号，2006年2月)。

(2) マザンディラン出土，テヘラン博物館収蔵の皿（Marcelle Duchesne-Guillemin, *Les instruments de musique dans l'art Sassanide*, Gent, 1993, p. 73, Fig. 19b）に描かれた楽器と同じであろう。バグパイプなどとする説がある。

(3)「鹿狩り」の浮彫りには複数の棒状トランペットがみられたが，その中の1人で，騎馬王の右側上方部分に座して奏している楽人については，ダブルリードの縦笛の可能性も考えられる。

(4) Prudence Oliver Harper, *The Royal Hunter, Art of the Sasanian Empire*, 1978/ Ann C. Gunter and Paul Jett, Ancient Iranian Metalwork, in the Arthur M. Sackler Gallery and The Freer Gallery of Art, 1992/ Marcelle Duchesne-Guillemin, *Les instruments de musique dans l'art Sassanide*, 1993, Gent/ 深井晋司『ペルシア古美術研究　ガラス器・金属器』(吉川弘文館，1968年)。

(5) 田辺勝美「タークー・イ・ブスターン大洞彫刻研究」『岡山市立オリエント美術館紀要』2，1982年，69・70頁。

(6) 深井晋司「アナーヒター女神装飾鍍金銀製把手付水瓶 — 所謂『胡瓶』の源流問題について－」(同著，前掲書)。

(7) 同上論文，150・151頁。

(8) Marcelle Duchesne-Guillemin, *op.cit*, p. 113. 同書当該頁の翻訳にあたっては，新潟大学人文学部教授村上吉男氏のご尽力を得た。

(9)『人間と音楽の歴史　イスラム』(音楽之友社，1986年）図版82・95，96・102頁。

(10) M・D・ギューユマンはMarcelle Duchesne-Guillemin, *op. cit.*で5人の楽人について "cinqmusiciens" (p. 110.)，"autre musicien" (p. 113.) とし，男性とみなしている。

(11) 右肩の線はあるいは鼓の紐のようでもあるが，あるいは袖が無いガウンのようにもみえる。少なくとも下の部分の横が切れていることは確かであろう

(12) Prudence Oliver Harper, *op.cit.*, p.75.には，タークー・イ・ブスターンと同鉢（bowl）との衣装の類似の指摘がみられ，これを受けて，Ann C. Gunter and Paul Jett, *op.cit.*, 1992, p.163でも同様な指摘がなされている。

(13) Prudence O. Harper, 'Sasanian Silver Vessels:The Formation and Study of Early Museum Collections', John Curtis, ed., *Mesopotamia and Iran in the Parthian and Sasanian Periods : Rejection and Revival c. 238 BC- AD 642 , Proceedings of a Seminar in Memory of Vladimir G. Lukonin*, 2000, p. 51.

(14) Vesta Sarkhosh Curtis, 'Minstrels in Ancient Iran', Vesta Sarkhosh Curtis, Robert Hillenbrand and J. M. Rogers, *The Art and Archaeology of Ancient Persia: New Light on the Parthian and Sasanian Empires*, 1998, p.184.

(15) 銀のプレート[Michigan University], 銀のプレート[Cincinnati Art Museum], 銀のプレート[エルミタージュ美術館], 深皿[エルミタージュ美術館], 深皿［Collection Heeramanek］, 水瓶［Collection Heeramanek］, 水瓶［Beaux-Arts Museum, Lyon］, 水瓶［出光美術館］。Marcelle Duchesne-Guillemin, *op.cit.*のそれぞれ Fig. 7, 8, 9, 25, 27, 36, 38b, 40a。

(16) 岸辺成雄『唐代音楽の歴史的研究　続巻　楽理篇・楽書篇・楽器篇・楽人篇』（和泉書院，2005年，350～356頁。

(17) Plate, Metropolitan Museum, Plate, Freer Gallery of Art, Washington, DC, Bowl, Cleveland Museum of Art, MarcelleDuchene-Guillemin, *op.cit,*のそれぞれ Fig. 13, 14b, 21b。

(18) これについては Prudence Oliver Harper, *op.cit*, pp. 42-44, 53-54.で考察されている。

(19) John Curtis, ed., *op.cit*.p. 90. Silver bowl [Walters Art Gallery,Baltimore]。

(20) ニザーミー『ホスローとシーリーン』（東洋文庫 310）岡田恵美子訳による。

(21) 同上書，56頁。

(22)『中国石窟　敦煌莫高窟　一』平凡社・文物出版社，1980年の図版解説 7，228頁。

(23) 拙稿「嘉峪関・酒泉地域魏晋墓磚画，敦煌莫高窟壁画にみられる音楽資料について」『西北出土文献研究』第4号，2007年。

(24) ペルシアに題材を取ったと思われる饗宴・狩猟等での音楽の状況が描かれている。太原市文物考古研究所編『隋代虞弘墓』2005年。

(25) 遠藤徹『平安朝の雅楽　古楽譜による唐楽曲の楽理的研究』（東京堂出版，2005年）490頁。

(26) 津村眞輝子「王達の肖像　サーサーン朝のコイン」『季刊文化遺産　13　古代イラン世界』30頁。

(27) Shinji Fukai, ed., *TAQ-I BUSTAN IV*,University of Tokyo, 1983, p. 52, 53.,『季刊文化遺産　13　古代イラン世界』29頁等に「王冠形式」が掲げられている。

〈付記〉女神文水注を調査するにあたっては，中近東文化センターの足立拓朗・岡野智彦氏にお世話をいただいた。記して謝意を表する次第です。